

エ  
ッ  
チ  
で  
幸  
せ  
な  
生  
活

清  
楚  
な  
新  
妻  
と  
の  
甘  
い  
初  
夜  
か  
ら  
始  
ま  
る

著者 桐 刻

表紙 aa44

清楚な新妻との甘い初夜から始まる  
エッチで幸せな生活（体験版）

桐刻

◆プログラム◆初めての夜 . . . . . 3

◆第1章◆童貞初夜エッチはロマンチックに気持ちよく中出し . . . . . 7

## ◆プロローグ◆初めての夜

「ちゅ、ちゅむ……れる、れる、れろおお……っ。んっ、ちゅ、ちゅる、ちゅぶ、んぶっ、ちゅぶ、じゅるっ。ふあむ、れる、えお、えろろお……」

勃起したペニスに琴葉が舌を這わせた。

薄皮膚に覆われた亀頭を唇で食んだかと思えば、カリ首の裏を舌先で細かくくすぐる。陰毛の生えた根元へと鼻先を埋めて、垂れ落ちたものを舐め上げる。

たしか彼女は綺麗にすると行って、肉棒を舐め始めたはずだ。でもそんなの建前だっことはすでに気づいている。

一度は射精したペニスが舌背による愛撫を受けて、血管を浮き上がらせた。

「おちんちん、また元気になったね……♡」

反り返った肉棒に頬を近づけ、琴葉は子供のように無邪気に笑った。

彼女が成人していることは当たり前前の事実として知っているのに、かつての面影を重ねてしまう。

琴葉は身体を起こし、パジャマのボタンへと手をかけた。

ぷち、ぷち、とひとつずつ外すことで、生の乳房が目の前にさらけ出された。

「……………♡」

琴葉が僕の視線を受け止めて薄い笑みを浮かべる。

続いて彼女はベッドの上で膝立ちになると、パジャマのズボンと下着を見せつけるように、ゆっくりと脱ぐ。

「はぁー……………♡ はぁー……………♡」

荒い息をこぼしながら琴葉は僕の腰にまたがった。

発情した琴葉の裸体から視線を外せない。

白い肌には薄く汗が浮かび、豊かな乳房の頂点は興奮を示すように勃起していた。薄い陰毛の下は熱く濡れそぼり、透明で粘着質な雫がとろりと落ちて。

寝室の空気は湿度を増し、甘酸っぱい香りが漂う。それは海を思わせるような独特な性の匂いだった。

「ああ、朝陽……………やっと、私達ひとつになれるんだよ……………♡」

「どうして琴葉は……………」

僕の知っている琴葉は『エッチなことが嫌い』だったはずだ。

なのに結婚したからといって、自分からペニスを舐めてくるなんて。

こんな淫らな本性を恋人のあいだも隠していたのは、どうして。

「それはね、初めてのセックスはロマンチックで、それでいて永遠に忘れられないくらい気持ちいいものにしたかったから、なの」

琴葉は熱い吐息をこぼしながらゆっくりと腰を下ろした。

濡れた淫唇の粘膜がひたりと亀頭に触れた。

とろりと垂れ落ちる愛液が陰茎へと絡みついた。

さらに琴葉は腰を前後させて淫唇の粘膜をこすりつけてくる。

「あ、あ、あ、あ……♡」

初めて聞く、琴葉の快楽を帯びた声。

粘膜と粘膜を触れ合わせるといふ行為にペニスがより反り返る。

こんなくすぐるような刺激では物足りない。その淫唇の奥、子宮につながる肉の孔に挿入したい。だってそれがオスの本能だから。

でも本当にそれでいいのか。

欲望のままに身体をつなげてセックスしていいのか。

僕の葛藤なんて見透かしているとばかりに琴葉は小さく笑う。

「だって私達、夫婦、なのよ……♡ 夫婦が子作りするのは当たり前のことなんだか

ら……♡」

心から幸せだとばかりに琴葉はふわりと笑う。

つまり琴葉は初めてのセックスで中出し子作りセックスをしたかったから、エッチ嫌いな自分を演じていたというのか。

これが彼女の願望。

「朝陽ががんばったら、初めてのセックスで赤ちゃんできちゃうかもしれないね……♡」

琴葉はペニスに手を添えながら、膣孔へと導く。

亀頭が淫唇の孔をつぷりと割り開いて、僕は。

——これは、僕と琴葉の初めての夜から始まる日々の話だ。

## ◆第1章◆童貞初夜エッチはロマンチックに気持ちよく中出し

そこは僕達以外は誰もいない夕方の教室。

白いカーテンの向こう側から茜色の光が差し込んでいる。誰かが窓を閉め忘れたのか、涼しい風が吹き込んでカーテンをふわりと舞い上がらせた。

校庭からはいまだに帰宅していない生徒の声が聞こえるけれど、部活動はすでに終わっているようだ。だんだんと喧騒の声も遠く、消えていく。

薄暗い教室はどこか不気味だった。

それは同時に遠い幻想の世界のようでもあつて。

僕は、どちらかというところ、美しいにわかことはと思つた。

もしかしたらそれは、僕の目の前にいる庭坂琴葉にわかことはに対する印象なのかもしれない。長い髪が茜色の光に照らされて艶めき、白磁の肌も朱をわずかに帯びている。それは夕暮れという時間のせいだけじゃない。

きっと僕の頬もおなじように赤く染まっている。

僕達のあいだに緊張感が漂う。

でもいつまでも黙っているわけにはいかない。紅くれないの時間はあつという間に終わってしまふものだから。

すう、と息を飲み込み、僕は口を開いた。

「僕は……」

言葉音をにした途端、琴葉が肩を小さく震わせる。

期待の瞳が僕を見つめた。

「僕は、きみのことが、琴葉のことが……」

口にする音すべてを彼女が聞いている。

もしかしたらこの風景はこれからの人生で何度も思い返すものになるかもしれない。だから永遠の記憶に残っても恥ずかしくないように、僕は。

「好き、なんだ」

はつきりと、琴葉の瞳を見つめながら口にした。

琴葉は目を丸くして、次にゆっくりとまぶたを閉じて。

ピピピ、ピピピ、と無機質な音が聞こえる。琴葉がなにかを口にしたはずなのに、やかましい音にかき消されて聞こえない。

どうして、と思った直後。

「——はっ」

僕は目が覚めた。

いまは夕方なんかじゃない、窓からまぶしくも白い光が差し込む朝だ。

先ほどのまでの教室のやり取りは全部夢だ。

横寝になっていた身体を仰向けにして、天井に向かってため息を吐いた。目を閉じて夢の記憶を思い返す。

夕方の教室。頬を赤く染めて僕の前に立つ琴葉。

先ほどの夢はたしかに夢ではあったけれども、すべてが僕にとって都合のいい幻想なんかじゃない。

かつて高校生だったとき、僕は琴葉に告白した。

高校を卒業しても僕達は恋人同士のままで、そのつき合いは現在まで続いている。いや、続いたというか進化したというか。

「へへ……」

あのときの記憶はいまもはっきりと思い出せるくらい美しくて。

目を閉じたまま夢の残滓を味わう。

そんなことをしているせいか、頭がぐらりと二度寝に傾きかけた。  
「いや、寝ている場合じゃないって！」

夢の世界に落ちる前に僕は身体をあわてて起こした。

いくら今日が日曜日だからって、惰眠をむさぼるひまなんてない。  
今日はとても大切な用事があるんだから。



今日は三月二十九日、日曜日だ。

キッチンで朝食を食べた僕は自分の部屋へと戻った。本棚も机も中身はない。半分  
以上は昨日のうちに業者にとって行ってもらって、残りは押し入れに入れた。

着替えや財布などを入れたショルダーバッグを持って、僕は実家を出た。

朝の十時。

春らしい穏やかな気温の中、汗ばむまで走って目的地へと向かう。徒歩で行けばち  
ょうど待ち合わせの時間になるはずだ。

それでも待ちきれない気持ちで僕を焦らせる。

駅の東口、日差しを避けるように立っていたのは琴葉だ。

琴葉は僕の姿を見ると、軽く手を振った。僕は琴葉の前まで走った。琴葉は焦る僕の姿に笑みを浮かべる。

「あら、早かったじゃない、朝陽。あさひ 謹厳実直。きんげんじつちよく 本当にいいことよね」

「も、もう来てるひとは言われたくないなあ」

顔の汗をぬぐいながら僕は琴葉の姿を見た。

今朝の夢よりも背が少しだけ高くなり、幼さも抜けている。顔の彫りも、比較すればわかるくらいにほんのちよつと深くなった。

なぜなら今の琴葉は大学を卒業したばかりの立派な成人女性だから。

長い髪は艶を増し、風に舞うと薄絹のように美しい。

高校生のころは力を入れれば折れてしまいそうな儂さがあった。でも今の琴葉は太陽の日差しがよく似合う健康的なスタイルだ。

胸、とか以前よりも明らかに大きくなっていると思う。

「ほら、こっち来て。汗をふいてあげるから」

琴葉は水色のハンカチを取り出すと、僕の顔を流れる汗をふき取った。頬をかすめるときに柔軟剤の香りがほんのり漂った。

今日の琴葉はTシャツにブルゾンとデニムパンツという、動きやすい姿だ。そういう僕も似たような姿ではある。

「それじゃあ、昼ご飯はどうしようか？ 荷物は午後に届く予定だし。とりあえず向こうでランチが食べられそうな場所も調べてるんだけど」

「実はね……今日はお弁当を作ってきてるの」

そう言いながら琴葉は自分が持っているトートバッグを持ち上げた。

「あなたがおいしいって言ってくれたキッシュも入ってるんだから」

「あ、ありがとう。言ってくれば僕もお弁当作ってきたのに」

「いいの。せっかく新婚生活が始まるんだから。新妻っぽいことしてみたかったの」  
照れくさそうに琴葉は小さく笑った。

新婚、新妻。その言葉に僕は胸をとくとくと高鳴らせる。

本当に僕は琴葉と結婚したんだ。

今だって、まるでデートの待ち合わせのようなのに。

「琴葉と結婚したの、僕の夢や妄想じゃないんだな」

「まだそんなこと言ってるの？ たしかに入籍したのは学生るときだから結婚式は挙げなかったけど。でも婚姻届は一緒に出しに行ったでしょう」

「やっぱ書類だけじゃあんまり実感湧かないかも。それに入籍しても今までお互いに実家で暮らしてたんだし」

「学生だったんだもん、しょうがなかったじゃない。でも、これからは、ね……？」  
「うん……」

琴葉は僕の手にと自分の指を絡めた。

「これからは同じ屋根の下の生活ね」

そつとささやかれる言葉に僕はうなずいた。

僕、ささきのあさひ笹木野朝陽と彼女、庭坂琴葉は結婚した。これからは琴葉は笹木野琴葉と苗字を変えて、僕と一緒に暮らしていく。

僕と琴葉が知り合ったのは中学生のころだ。

最初に琴葉に抱いたイメージはあまりよくなかった。

真面目で明るいクラス委員長としてみんなを引っ張っている人気者。でも僕には彼女が無理をしているように見えた。

だからある日「無理して人気者になるのもつらくない？」と言ってしまったんだ。

それ以来、なぜか琴葉は僕との距離を詰めてきた。

べつに琴葉は僕のことを好きになったわけじゃない、からかうためにわざとやっているんだ。

そのことには最初から気づいていたのに、僕はだんだんと彼女を意識するようになった。

琴葉もからかいのためにやっていたはずなのに顔を赤く染めることが増えた。

僕達の距離は近くなり、親友ともいえる間柄になって。高校も同じ学校を選んで、僕達は常に一緒に行動していた。

僕は琴葉のことが好きになったし、琴葉からも似た気持ちを持々感じた。

だから僕はとうとう琴葉に告白した。

それから僕は恋人になり、大学も同じものを選んだ。さすがに学科まで同じにはしなかったけれど。

時間が合えばできるだけ一緒の時間を過ごす、そんなスクールライフを送っていた。

大学4年生になった春。

「朝陽、結婚しましょ」

そんなことを不意に言われたのだった。

僕も同じ気持ちではあった。

でもそれは社会人になって数年後を考えていた。

恋人になってから結婚の話は何度かしていたから。

「ううん、違うの。大学の在籍中に入籍したいの。卒業したら一緒に暮らす予定だったでしょ？ どうせ一緒に暮らすなら入籍してからにしたいな。結婚したあとに職場で苗字を変える手続きをするのも面倒なの」

それは本当に在学中に入籍するほどのメリットになるのか。

以前から琴葉は僕と同じ苗字になりたいと言っていた。琴葉は家庭の事情で自分の苗字があまり好きでないようだった。

早く入籍をしたいのもその事情に関係あるのかもしれない。

改姓の手間があるのは琴葉だけだ。

それなら僕は、琴葉の負担を減らすために彼女の言うとおりにしたほうがいいのだろうか。

いろいろ悩んだけれども、結局僕達は在学中に結婚することにした。

不安はもちろんある。

同棲もしたことないのにいきなり入籍するなんて。

仲の良かったカップルが同棲しているうちに価値観の違いに気づいて、別れてしま  
うなんて話はよく聞く。

やっぱり同棲生活を何年かしたあとに結婚すればよかったのではとも何度も思った。  
でももう後戻りはできない。

それならば後悔し続けるよりは前を向きたい。

大切な琴葉との生活を幸せなものにしたい。

これから僕の人生を共に歩むのは、琴葉なんだから。



電車で移動して新居の最寄り駅で降りた。

新居は賃貸マンションの2DKだ。

在学中にバイトで稼いだし、四月からは僕も琴葉も新入社員として働く。家賃に困  
ることはしばらくないだろう。

前日に掃除はしたけれど、念のために軽く掃除をする。新しい家具はすでに運び込まれている。午後になれば実家から送った荷物が届いた。

それらを収納しているうちに夕方になった。

僕と琴葉は近くのスーパーに行つて数日分の食材を買った。

「特別な日だからお鍋を食べたいの」

琴葉がそう言ったので鍋にすることに。鶏肉と春キャベツを使った塩レモンの鍋だ。僕が野菜を切るあいだに琴葉がスープの味を調えてくれた。

ダイニングキッチンテーブルに卓上コンロを置いて、土鍋で具材を煮立てていく。用意したのは鍋だけじゃない、唐揚げやピンチョスなども作った。そしてそれをおいしくするアルコール類も。

「ふふ、それじゃ大人なんだから乾杯、しましょ？」

左隣に座った琴葉がチューハイの缶を傾けた。

琴葉のことは中学生のころから知っているのに、今ではアルコールを摂取できくらしいの大人に。その微笑は椿の花のような艶めきがあった。

「乾杯」

胸を少し高鳴らせながら、自分の缶チューハイを琴葉のものに軽くぶつけた。

土鍋のフタを開ければ、塩レモンのさわやかな香りが湯気と共に広がる。

僕達はそれぞれに土鍋の中身を取り皿へと移して、口に運んだ。

「んーっ、鶏肉おいしいー！ やっぱりお鍋って特別な味がするわね。だから最初の日は絶対お鍋って決めていたの」

口をもぐもぐさせる様は中学生のころを思い起こさせるように幼い。いや、中学生のころの彼女はクラスメイトの前では猫を被っていたから、こんな顔をするのは僕の前でだけだったけれど。

「私のうちでは鍋とか全然しなかったの。だから初めて食べたのが高校のとき」

「もしかして文化祭が終わったあとにみんなで食べたやつ？」

「そうそれ。みんなで具材を用意して、わいわいお菓子をつまみながらお鍋が煮えるのを待って……。ふふ、楽しかったわね」

琴葉が少しだけ遠い目をする。

長いまつ毛の横顔を見ていると、僕は少しだけ違うことを思い出す。

みんなで鍋を食べたあと、校庭でキャンプファイヤーがあった。揺れる炎を穏やかな瞳で見つめる琴葉の姿。彼女の横顔を見ながら、ああ好きだなと感じたこと。

「どうしたの、私のこと、見つめちゃって」

気づいたら琴葉のほうから声をかけられた。

「え、えっと」

「新妻と初めての夜だから意識しちゃった？」

くすりと笑いながら僕をからかう琴葉。

「べ、べつにそういうわけじゃ……」

「あら、そうなの？ 私は、意識しちゃってるけどなあ……」

琴葉は僕を見つめながら目を細くする。

「朝陽と、初めての夜なんだから」

初めての夜。

それがどういう意味を持つのか、今日までのあいだに何度も考えてきた。

「ほ、本当に初めてってわけじゃないだろ。僕の部屋で映画見たり、ゲームしたりはあったじゃないか」

「もう、この期に及んでそんなこと言っちゃうんだ。でも私は朝陽のそういうところ、かわいいて思ってるわよ」

くすくすと笑う琴葉に僕は昔の面影を重ねた。

「そういうふう僕をからかうところ、昔と変わらないなあ」

「ふふ、これからはあなたのかわいいところ、もっとたくさん見られるのね」  
琴葉はテーブルの皿からまぐろのたたきのピンチョスをつまみあげた。

「ということ、あーん♡」

高校生のころも、クラスメイトの前でわざとそういうことをしてきた。そのころの僕はそんなことできるわけないと逃げていた。

でも、今この部屋に僕達以外の存在はいない。

さらに僕は夫婦という、公的にも認められた関係だ。

躊躇する理由なんて恥ずかしいから以外にはなく、僕は緊張しながらも口を開けてそれを受け入れた。

「おいしい、ね」

「よかった。レシピ調べたかいたわ」

「じゃあ僕も」

僕も大根おろしの乗った唐揚げをひとつ爪楊枝で刺して、琴葉の口へと近づける。

「はい、あーん」

あえて意識して琴葉の目を見つめると、琴葉は頬をわずかに赤くして視線を逸らした。それでもおそろおそろというふうに唐揚げを口にする。

「……ん、もぐ……いじわる……」

「きみがしたことをお返ししたただけだよ」

「もう、生意気なんだから。あら、朝陽の手に」

気づいたら僕の手は大根おろしのソースが少しついていた。

「……ちゅ、れる……」

琴葉が僕の手首を握り、指先についたものを舐め取る。ぬるりとしたものが触れて、僕の鼓動は一気に跳ね上がってしまう。

「……ちゅ、ちゅ……」

大根おろしなんてもうとくになくなっているのに、琴葉は何度も僕の指先にキスをする。

「ほら綺麗になった」

舌先を少しだけ出しながら琴葉は含み笑った。

「そっ、そうだねっ！ あ、ありがとうっ！」

僕はあわてて琴葉から視線を逸らす。

しばらく自分から琴葉に声をかけられなかった。



2DKのふたつある洋室のひとつは寝室にした。

琴葉よりも先に入浴を済ませて、僕は新品のダブルベッドに腰かけていた。

『夫婦なんだから一緒に寝るものでしょ』

家具を選びに行った日、琴葉はそんなことを言って半ば強引にダブルベッドを購入した。

つまり、これからは琴葉と一緒に布団で寝るということ。

(そ、そんなの、つきあっているときにもなかったじゃないか！)

僕の部屋に琴葉が泊まることは何度かあった。でもそんなときは映画やゲームで徹夜して、どうしても眠いときは来客用の布団を敷いていた。

そう、僕は琴葉と一緒にベッドで寝たことはない。

それは性的な意味としても。

僕は童貞だ。そしておそらく琴葉も処女だ。

悪友からは『おまえらセックスしまくりなんだろう』とかからかわれたけれど、そんなことはありえなかった。

もちろん僕も若い男だ。

琴葉とエッチなことをしたいという気持ちは何度も生まれた。

でもたぶん、琴葉はエッチなことが嫌いなんだと思う。

高校のころにクラスメイトの男子がエッチな本を教室で読んでいたとき、ものすごく嫌そうな顔をしていた。僕とふたりきりになったときはたくさんの文句を言った。

琴葉は僕をからかうことはたくさんあったけれども、それは僕にある種の信頼を持つていたからじゃないだろうか。

おとなしくて真面目な僕なら琴葉を襲ったりしないって。

だから僕は琴葉の前ではできるだけそう振る舞うようにした。

内心では、他人に明かせない劣情を抱きながら。

琴葉とエッチなことはしたい。

だけど僕にとって琴葉は大切な人だ。自分の欲望を押しつけて琴葉を傷つけることは絶対にしたくない。

琴葉はキスだけは許してくれた。

キスから先のことを少しでも求めそうになると、琴葉はためらいながらそっと優しく距離を取った。

だから僕はキス以上のことをしなかった。  
でも、今日からは夫婦だ。

初夜という言葉がある。

夫婦が初めて一緒に迎える夜にはそういう行為を示す意味もあって。  
僕はベッドに座りながらこぶしを握りしめた。

（エッチなことを考えすぎなんだよ！　こんなの琴葉に失礼だ！）

夫婦だからと一方的に身体の関係を求めるのはいけないことだ。

琴葉を大切にしたい。この気持ちはずっと抱えてきたもの。

僕と琴葉は同棲だとしていない、ひとつ屋根の下で生活するのは初めてだ。  
そもそも最初は結婚じゃなくてただの同棲を想定していた。結婚したのは、その  
うが琴葉の都合によかったから。

（だから、我慢、我慢なんだ……！）

琴葉とエッチなことをしたくても、気持ちをいきなり押しつけたりしない。まずは  
同棲生活に慣れて距離を縮めてからだ。

エッチなことが苦手な琴葉も、きっとそう思っているだろうから。

不意に、風呂場のほうから音が聞こえた。

どうやら琴葉の入浴が終わったようだ。

我慢すると決めたばかりなのに、琴葉の裸身を想像して下半身に血流が勝手に集ま  
っていく。自分で自分の頭をぼかぼか殴って、部屋の扉に背を向けた。

やがて静かに扉が開く気配がする。

いつまでも背を向けているのも失礼なので、ゆっくりと振り向いた。

「……………」

クリーム色のパジャマを着た琴葉がそこに立っていた。パジャマは前をボタンで留  
めるタイプのもので、どのボタンも性格を表すようにきちんとはめられている。

琴葉は長い髪をひと束、指に絡め取ってくるくると弄んでいた。

「お風呂、入ってきた……」

「う、うん」

報告されなくてもわかっていることを琴葉は告げた。

「あつ、じゃあ僕はお風呂掃除を」

ベッドから立ち上がりかけた僕を琴葉が止めた。

「大丈夫、簡単に済ませてきたから」

「そ、そうなんだ。じゃあ……今日は、もう、寝る？」

「そうしよう、かしら」

「一緒のベッドになるけど、大丈夫……？」

今さらの状況で僕はそんなことを聞いた。

「夫婦だから、もちろん」

琴葉は僕が腰かけている側の反対側からベッドに入った。僕も同じように布団をめぐってベッドの中へと入った。

しばらく僕達のあいだに会話はなかった。

もう眠ってしまったと考えるには隣から聞こえる呼吸の気配は浅かった。

まぶたをぎゅっと閉じてても睡魔が訪れる気配はない。どくどくとうるさい自分の鼓動を意識するだけだ。隣の琴葉も同じなんだろうか。

十数分ほどの時間が過ぎたとき。

「ねえ。朝陽」

不意に琴葉が声をかけてきた。

「……なあに」

できるだけ平静を装いながら答えると。

「初めてキスしたときのこと、覚えてる？」

その問いかけに僕はごくりと息を呑み込んだ。

「覚えてる、よ……」

高校生のころ。

「夏、だったよね。ふたりでコンビニでアイスを買ってさ」

「ええ。そのあと公園のベンチに座って食べたわよね」

暑い日差しのおかげで冷たいアイスがおいしくて。

「あなただったら大きな口を開けて子供みたいに食べちゃって。だから口元が汚れちゃって」

「……うん。だからきみがハンカチで拭いてくれようとしたよね」

本当にハンカチで拭くつもりだったのか、それはよくわからない。

ただ、そのとき僕の唇に触れたのは、ハンカチじゃなくて琴葉の唇だった。

それが僕達の初めてのキスだ。

それから何回もキスを重ねてきた。誕生日やクリスマスのような特別な日。放課後の教室やデートの帰りにだって、僕は。

「……………」

琴葉の手が僕の手に触れた。

過去のことを話しているあいだに琴葉は僕との距離を詰めていた。さすがに僕もそのことには気づいていて。でも離れたくはなくて。



「こっちを、向いてほしいな……」

僕の手に自分の手を重ねて、琴葉はつぶやいた。

手を握り返しながら彼女のいる方向へと身体を傾ける。すると琴葉も同じように僕へと身体を傾けてきた。

思ったよりも近くに琴葉はいた。

「……………」

僕を見つめながら、唇を噛む琴葉。寝室の照明は睡眠をさまたげない薄暗いものになっただけで、琴葉の頬が赤く染まっているのはわかった。

新婚夫婦。初夜。

そんな言葉が再び僕の脳裏をよぎる。

琴葉はエッチなことが苦手で。こんなのは同じベッドで寝るから緊張しているだけ。でもじつのところは琴葉も僕と同じことを期待していたら？

いきなり琴葉がさらに距離を詰めて、僕の腕の中へとすっぽり収まった。

「……………えへ……………♡」

琴葉は僕の顔を見上げながら無邪気に笑う。瞳はくりくりと丸く、唇は甘いイチゴキャンディのように艶を帯びている。

（か、かわいい……………）

恋人でもあり妻でもある存在の愛らしい笑みに胸がとくとくと高鳴った。

石鹸とシャンプーの香りがふわりと漂った。男とは違う女性のやわらかい身体がパジャマ越しに押しつけられる。琴葉の熱を、間近に感じる。お互いのあいだの湿度が増したような気がした。

「だ、ダメだよ、寝てる男のこんな近くに來たら」

「あら、どうして？」

「だ、だって、危ない……………」

「ふふ、危ないって。私達、もう夫婦なのよ？」

そう僕達は夫婦。公的にも認められた関係。

たとえ夫婦だとしても身体の関係を無理矢理求めることはいけない。

じゃあ、お互いにそれを望んでいたとしたら。

「本当に危ないのは、どっちだと思う？」

そうつぶやいた琴葉が僕の肩へと腕を絡めた。顔と顔が急に近くなり、琴葉は僕へとキスをした。

「……ん、ちゅ……」

反射的にまぶたを閉じてしまった。だってキスをするときはいつも目を閉じていた。そしてそのキスはいつも一瞬の出来事だった。

「……ん、れる……んむ……」

なのに琴葉は離れようとしなない。それどころか僕の唇の隙間に舌をねじこもうとしてきた。恐る恐る開いてみると、琴葉の舌が口腔へと侵入してきた。

「……ちゅ、れる、ちゅ、ちゅる……」

琴葉の舌が僕の舌へと触れた。

「んう……っ！」

思わず身体を硬直させると琴葉が含み笑った気配がした。

れる、れる、と生温かいものが僕の舌をくすぐる。いったい僕はどうすればいいん

だろう。ディープキスの存在は知っている。でもこんなことをするのはずっと先だと思っていたから、やりかたなんて学んでない。

「ん、ふふ……♡ れる、ちゅ、ちゅ、ちゅむ……」

動きかたを知らない僕に教えるように、琴葉は舌をゆつくりと動かした。それだけじゃない、精一杯に伸ばされた舌先が僕の上顎をくすぐった。

「つつ！」

ぞくぞくとしたものがうなじのあたりを走った。

僕も、キスをしなければ。方法はわからないけれども琴葉の真似をしていれば。

そんなふうに舌を動かそうとしても、緊張している状態じゃ動いているのか動いていないのかもよくわからなかった。

「んふふ……ちゅ、ちゅる、ちゅ、れる、れる、れろお……」

キスをしているあいだに琴葉の太ももが僕の脚に絡んだ。脚のあいだに滑り込んだ太ももが股間へとこすりつけられた。

（や、ヤバイ！）

キスをしているあいだに下腹部に熱が集中していた。

ぐり、と太ももを押しつけられて自分のものが勃起しかけていることに気づく。

「ん、んむう……!!」

恥ずかしいのと息ができないのとで頭がぼんやりしてくる。

「……ふふ……♡　ちゅ、ちゅるっ、んっ、んむ、んんう……♡」

琴葉は深くキスをしながら、僕の身体へと乗り上げてきた。いつの間にか仰向けになった僕は、琴葉に押し倒される体勢になっていた。

「ん……ちゅ、ちゅ、れる、れろお、れるう、んじゅるうっ」

豊満な胸を押しつけながら、琴葉はディープなキスを続ける。琴葉に返してやろう、真似をしようと思っていたはずなのに、僕は口腔を蹂躪されるままに。

「ちゅるっ、ちゅるるっ」

琴葉が僕の唾液を吸う。同時に琴葉のものが僕の口腔へと注がれた。僕はその熱い液体を嚥下しながら甘いと感じていた。

それは初めてキスをしたときに食べたアイスの味を思い出させた。

「ちゅ、ちゅむ……ふふ……♡」

琴葉の腕が僕の肩から離れたと思うと、今度はキスをしながら股間を撫でた。パジャマ越しとはいえ愛撫ともいえる動きに、僕は身体をびくっと震わせた。

「今まで私のこと、エッチが苦手な子だと思ってた？」

唇を離れた琴葉が面白そうにつぶやく。思わず閉じていた目を開けると、琴葉が目を細めて笑っていた。

こんな欲望をギラギラさせた眼差し、見たことない。

「あなたの前では意識的にそう振る舞っていただけで、本当はものすごくエッチなんだ、私……♡」

深いキスのせいで唾液に濡れた唇を、琴葉はぺろりと舐め上げる。

意識的にそう振る舞っていた？

それは本当の本当に？

だって僕は、琴葉がかつて真面目な委員長を演じていたことにも気づけたから。

「そうね。あなたは猫を被っていた私のことに気づいたものね。だから、すごく気をつけてたのよ。エッチな私に気づかれないように、わざとエッチなことに怒ってみたね。でもキスは我慢できなかったから自分からしちゃったの……♡」

ちゅ、と琴葉はいたずらに触れるだけのキスをする。

「私は気づいていたよ。あなたが本当はエッチなことをしたくてたまらなかったの」  
そうささやきながら琴葉は僕のペニスをすると撫でる。

「う、うう……!!」

初めて自分以外の存在に触れられる感触。

これ以上はいけないと思っているのに性器は硬くなる。

「あなたの視線が、私のおっぱいやお尻に向くこともあったわよね。でもすぐに悪いことを隠すように視線を逸らすの。ふふ、うれしかったし、ぞくぞくしちゃったあ」  
そんなことにまで気づかれていた。

僕は恥ずかしさと気持ちよさのせいで琴葉から視線を逸らした。そのあいだにも琴葉は僕のペニスのかたちを確かめるように手を這わせる。

琴葉のささやきが僕の耳に届く。

「ね、私をおかずにオナニーしていたの？」

「そ、それは……っ」

「してたの？」

「うう……!!」

「してたんだあ……♡」

くすりと笑う琴葉の吐息が僕の耳朵をくすぐった。

「私もね、あなたのことを想いながらオナニー、してたんだよ……♡」

僕のペニスを撫でながら、琴葉は太ももを僕の脚へと絡めた。琴葉の女の子ともい

える部分が脚へと押しつけられた。パジャマ越しであったはずなのに湿度と熱を感じた。

「あなたの、これを、私のあそこに挿れることを考えながら、気持ちいいところをくにくについて触って、ね……♡」

する、する、と琴葉の指が陰茎をなぞる。

本当に琴葉は僕と同じようにオナニーしていた？

僕が琴葉の制服姿や水着姿を思い浮かべながら自慰していたのと同じように、琴葉も僕のことを思いながらおまんこを触っていたのか？

思わず琴葉の秘めた姿を想像してしまう。

「ごめんね、エッチしなかったのにずっと我慢させちゃったわね」

琴葉の指が陰茎の根元から亀頭の先までゆっくりと這う。

「このおちんちんを、私のおまんこに挿れたくてしょうがなかったよね……？」

まるで小動物を労わるかのように琴葉はペニスを優しく撫でた。

想像したのは琴葉の姿だけじゃない。実際に僕が琴葉とセックスしていることさえ。今も脚に押しつけられているやわらかな最奥に肉棒を埋めたら、どれだけ気持ちよくなれるだろう。

「あは、暑くなってきた」

琴葉は僕達に被さっていた布団をはいで、身体を少しだけ起こした。

「初めてだけど、ちゃんと勉強してきたのよ」

そう言いながら琴葉は僕のズボンへと手をかけた。パンツと一緒にズリ下ろされて、勃起したペニスがぴよんと飛び出た。

「わ。わあ……♡　これが朝陽のおちんちん……♡」

ペニスを見た途端、琴葉はごくりと息を呑み込んだ。

「本物は、すごいね……。玩具と違って、ちゃんと生きてる感じがしてる。びくつ、びくつって震えて、かわいい……。♡　そんなに怖がらなくてもいいのよ、ちゅっ♡」

亀頭の先端へとキスをされると、びりりとした細かな電流が走った。

「や、やめなよっ、そこは汚いよ……!!」

「あら、何を言っているの？　私もあなたもお風呂に入ったばかりじゃない。それに、全然期待してなかったってわけじゃないんでしょ……?」

「はう……」

同じ屋根の下、一緒のベッドに入る。琴葉はエッチなことが嫌いに違いないと思っていたけれど、本当の本当になんたく期待していなかったわけじゃない。でもそれを

知られるのは恥ずかしかった。

「大丈夫、ちゃんと石鹸のいい匂いしてるわ……♡ すん、すん……。あ、でもちょっと独特の匂いがするかな。私のおまんこの匂いにも似た、いやらしい香り……。♡ すん、すん……。♡」

ペニスの根元から亀頭の先端までに琴葉は顔を近づける。

成人したとはいえ、中学生のころに清楚な委員長をやっていた名残は充分に残っている。みんなの憧れだった琴葉の顔面に、自分の勃起したペニスを突きつけているんだ。

「大丈夫よ、実践は初めてだけど玩具で練習してきたんだから。ふあむ♡」

琴葉はペニスの先端を口に含む。

「じゅるっ、じゅうう……っ、じゅ、じゅぶ、じゅぶ、じゅるう……」

それはただどしくはあったもののフェラチオで間違いなかった。

「じゅ、れる、れろ、れるう……れろ、れろ、えろお……」

亀頭だけを口に含みながら、琴葉は舌先で薄皮膚を舐め回した。ペニスの中でも敏感だといえるところを責められて、腰が勝手に震えてしまう。

「れる、れろお……。♡ あは、おちんちんってこんなにおいしいものだったのね……」

♡ それとも朝陽のだから特別に感じるのかしら？」

一度ペニスから口を離れた琴葉は唾液をおいしそうに舐め上げた。

「じゃあ、いくわね♡　じゅぶるっ♡」

再びペニスを口にした琴葉が、今度は喉奥深くまでペニスを呑み込んだ。

最初は試すような動きだったのに、慣れた動きで陰茎に舌背をぬるぬると絡みつかせる。

「じゅるるっ♡　じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶっ、じゅるるるうっ♡　じゅぶるうっ

♡　じゅぶぶっ、じゅちゅっ、ずちゅうっ♡　んじゅっ、じゅちゅうっ♡　じゅぼっ

♡　じゅぼっ♡　じゅぼっ♡　じゅぼぼっ♡　じゅりゅりゅりゅううっ♡」

イチゴキャンディの唇がアイスじゃなくて僕のペニスを奥深くまで頬張っている。

亀頭の先端が喉奥に触れるまで深くだなんて。玩具で練習してきたというのは嘘じゃないんだろう。

（琴葉が僕のために玩具で練習を……!）

そんな空想がリアルの感触と連動して、僕を興奮させた。

「じゅぶっじゅるじゅる、じゅぶぶぶっ♡　じゅりじゅりゆう、じゅぼ、じゅぼ、じゅぼぼぼっ♡」

今まで味わったことのない“生”の粘膜が男根を包み込む。オナホや自分の手とは違う、命というものを感ずる。

何よりも、熱い。

パジャマを通して感じた肌の熱よりもずっと熱い。それに口腔から染み出る生温かい唾液がぬるぬると陰茎に絡みつく。

まるで本当の性器に挿入しているかのようだ。

(もしかしたら、このまま……)

フェラチオだけじゃない、僕達はこのまま本当に身体をつなげるかもしれない。

「じゅる、じゅぶうつ♡ あは、おちんちん、びくびくして熱くなってきたあ……♡  
もしかして射精したいの？ ねえ、したいの？」

唾液に塗れた陰茎を手でぐちゅぐちゅとしごきながら琴葉は僕を見つめ、笑った。  
僕がこんなにも恥ずかしくなっているのを楽しんでいるんだ。

琴葉は猫を被っていた。

でも隠していたのは甘えん坊で、ちょっとぐうたらな姿で。

こんなにも性欲で瞳をギラギラさせた顔じゃなかったはずなのに。

「だ、ダメっ……！ 本当に汚い、から……！」

「ふふ、もう限界って顔しちゃって、かわいいの……♡ 大丈夫、朝陽は汚くなんか  
ないわ♡ だから私の口の中に、びゅーってしちゃっていいんだから、ね……♡ 私  
の大好きな朝陽だから、赦してあげるのよ……♡」

そう言いながら琴葉は再びペニスを口に含む。

「じゅりゅっ、じゅるるうっ♡ じゅぶっ、じゅぼっ、じゅぼっ、じゅぼ、じゅぼっ、  
じゅるるりゅりゅうっ♡」

喉奥までしっかり呑み込み、生温かい舌背をぬるりと絡みつかせる。逃げ出したく  
ても琴葉は僕の脚に身体を乗り上げているし、力も入らない。

いや、僕は本当に抵抗するつもりがあるのか。

このまま桃色の粘膜に射精したいと思っているんじゃないのか。

「だ、だめ……!!」

抵抗の言葉はすでに意味を為していない。

「いーふぉ♡ じゅぶるうっ♡ ほのみやみや、らひちゃっても、いーんらから、ね  
♡ じゅぶぶっ♡ じゅるじゅるじゅる、ずりゅりゅりゅるるっ♡ じゅぼっ♡  
じゅぼっ♡ じゅぼっ♡ じゅぼっ♡ じゅびゅりゅるるるっ♡ じゅぶりゅうっ  
♡」

トドメとばかりに琴葉の吸引が激しくなる。

鈴口の粘膜に直接与えられる刺激に、尿道がびりびりと震える。腰が勝手に浮き上がり、琴葉の喉奥を突いてしまう。

いいのか、本当に琴葉の口の中で出しちゃっていいのか。  
僕の劣情ともいえる精液を。

そんなのいけない、でもどうしていけない？　だって僕達は夫婦じゃないか。僕はずっとこうなることを求めている、それで琴葉も望んでいるのなら。でもやっぱり。

「あ、ああ……！」

びゅるるっ！　びゅくびゅくびゅく、びゅるるるっ！

理性と劣情で頭をぐるぐるさせながら、僕は琴葉の口腔に射精した。

「んんんっ！　んむ、んんう……っ！」

琴葉はペニスを咥えながら苦しそうな声をあげる。

「んっ、んう……っ、ん、ん、ん、んむ……♡」

ただどすぐに目を細めて、口腔に満ちたものを飲み込んでいく。それはまるで甘い甘いジュースを口にしたかのように。

「ん……、ぷはぁ……♡」

ずるりと琴葉の唇からペニスが抜け落ち、彼女はオス臭い息をこぼした。



「射精、しちゃったね……♡」

唾液と精液に濡れたペニスを片手で支えながら、琴葉は自分の唇をべろりと舐め上げた。赤い果実を思わせる唇に、僕は本当に射精してしまったんだ。

「ご、ごめん！ 我慢できなくて……！」

「我慢しなくてもいいのに。私達は夫婦、なんだから」

「でも、やっぱり、おいしくないと思うし」

「ううん、そんなことない。とーってもおいしかったあ……♡」

恍惚とつぶやいた琴葉は熱いため息を、はふうとこぼす。

「そうね、苦みはあったし、喉にすぐ絡みついて飲みにくかった。でもこれって、朝陽のエッチな気持ちがたくさん込められてるからでしょ？ そう思うと、全部愛しく感じちゃって……♡ おいしいお酒みたいに胸がドキドキしちゃうの」

いつもと同じクールな表情で精液の味を評価されると、恥ずかしさで逃げたくなる。

「本当においしくて、おいしくて……♡　ちゅ、れろお……」  
琴葉は射精したばかりのペニスに舌を這わせた。

「れる、れろお……、ちゅ、ちゅる……もったいないから、ちゅっ、全部舐めちゃう  
ないと……れる、えるるう……っ」

根元に垂れた雫を舌先ですくいとりながら、カリ首まで舐め上げる。

「れる、れろ、ん、えろろお……♡　あは、すっごくおいしい♡」

敏感な箇所には琴葉の舌が触れ、僕は再び腰を震わせた。

「ん、ちゅ、れるう。お風呂に入ったのに、ちゅむっ、汚く、しちゃったものね、ちゅっ♡　私が、責任取ってきれいにしてあげる。れる、えろろお……っ」

唾液と精液が混ざって白濁した液体を、琴葉は舌背ですくいとる。白く濁っていた  
ものが透明なものへと変わっていく。

射精したばかりのものに刺激が与えられ、僕は息を整えることもできない。

「そ、そんなの、またお風呂に入れば……っ」

「えっ?」

くすくすと笑いながら琴葉は陰茎へとキスをした。

本当にお風呂に入ればいいと思っている?　そういう意味じゃないってもう気づい

ているでしょ。

琴葉の視線は言葉にしくてもそう物語っていた。

「ちゅ、ちゅむ、ちゅる……ダメ、なんだから。これで終わりだなんて……れる、ろお、れるれる……射精して気持ちよくなったの、あなただけでしょ。ん、ちゅ、ちゅ、私達は、ちゅっ、夫婦なんだから、ね」

どこか恨めしげな視線を僕に向けながら、琴葉は陰茎をはむはむと咥える。

ここで終わってしまったら気持ちよくなったのは僕だけだ。

「そ、それなら……」

「私を愛撫で気持ちよくしてくれるの？ ふふ、それは今度にお願いしようかしら。

あなたは気づいてないかもしれないけど、私のおまんこはもうぐちゅぐちゅなんだからあ……♡」

「……………!」

僕にとって未知の世界である琴葉の性器を想像してしまった。

それだけじゃない、この寝室に満ちた濃密な気配は滴り落ちる愛液のせいかもしれないと考えた。

「あは、想像しちゃったの？ おちんちん、びくってして元気になったわよ……♡

そうだね、おちんちんもおくちだけじゃなくておまんこに入りたいよねえ」

まるで小動物に対するかのように琴葉はペニスに話しかけた。

僕だって、琴葉を気持ちよくしてあげたい。

でもどうすれば。

この状況を夢見てきたはずなのに具体的な方法がまったく思いつかない。今まで見たエッチな媒体の記憶を思い出せない。

「ちゅ、ちゅむ……大丈夫だよ、あなたにロマンチックな初めてをあげるつもりなんだから……れる、れろお……失敗して、後悔するなんてことにはさせないから……れる、れろお……っ」

丁寧は丁寧に琴葉はペニスを舐め上げる。綺麗にするなんて建前はとっくの昔になくなっていく。少しざらついた舌背の表面でくすぐられれば、萎えたペニスは再び血管が浮き出るほどに勃起した。

「はぁ……♡ おちんちん、また元気になったね……♡」

振り返った肉棒に鼻先を近づけ、琴葉は満足げに笑った。

「もうダメ、我慢できない……!!」

身体を起こした琴葉がパジャマと下着を脱ぎ捨てる。

ぶるんと揺れる白い乳房にも僕は目を奪われた。

「はぁー……♡ はぁー……♡ はぁー……♡ はぁー……♡」

荒い息をこぼしながら琴葉は僕の腰にまたがった。

初めて目にする琴葉の裸体。しかも琴葉は発情している。白い肌には薄く汗が浮かび、張り詰めた豊かな乳房の頂点は興奮を示すように勃起していた。

薄い陰毛の下は熱く濡れそぼり、透明で粘着質な雫がとろりと落ちて。

先ほど感じた濃密な気配よりもはつきりと感じる独特な性の香り。

「ああ、朝陽……やっと、私達ひとつになれるんだよ……♡」

「どうして琴葉は……」

こんなにも淫らな本性を隠していたんだ。

夫婦じゃなくても恋人同士ならセックスしてもいいだろうに。

わざわざ『エッチなことは嫌い』と思わせるように演技をしていたのは、どうして。

「それはね、初めてのセックスはロマンチックで、それでいて永遠に忘れられないくらい気持ちいいものにしたかったから、なの」

琴葉はゆっくりと腰を下ろす。

濡れた淫唇の粘膜がひたりと亀頭に触れた。

「朝陽だって男だもの。大好きな女の子を孕ませたくて孕ませたくてしょうがないでしょ。それが動物のオスの本能だから。だから初めてのエッチはゴムなんかつけないで、安心して中出ししたいわよね」

とろりと垂れ落ちる愛液が陰茎へと絡みついた。

さらに琴葉は腰を前後させて淫唇の粘膜をこすりつけてくる。

「あ、あ、あ、あ……♡」

初めて聞く、琴葉の快楽を帯びた声。

本能を刺激されて、ペニスがより反り返る。

こんなくすぐるような刺激では足りない。その粘膜の奥、子宮につながる肉の孔に挿入したい。そして琴葉の言うように大好きな女の子を孕ませたい。

「そ、そうだ、コンドーム……!!」

僕は身体を起こすために上半身に力を入れようとした。

こんなことになるなんてまったく思わなかったわけじゃない。ベッドの隙間にはコンドームを隠していた。

でも力を入れる前に、琴葉は僕の唇へと人差し指を当てた。

「朝陽が用意してたコンドーム、捨てちゃった」

「な、なんでっ」

「生まれて初めてのセックスで出す精液を、ゴムの中に出すなんてもったいないじゃない」

「じゃあ、もしかして琴葉はピルを飲んでいる……？」

「ピルなんて飲んでないわ」

思惑通りに進んだとばかりに琴葉は薄い笑みを浮かべた。

「だって私達、夫婦、なのよ……♡ 夫婦が子作りするのは当たり前のことなんだから……♡」

つまり琴葉は初めてのセックスで中出し子作りセックスをしたかったから、エッチ嫌いな自分を演じていたというのか。

「朝陽ががんばったら、初めてのセックスで赤ちゃんできちゃうかもしれないね……♡」

ペニスに手を添えながら琴葉は腰をゆつくりと、ゆつくりと下ろす。

もう抵抗はできない。

身体を起こして逃げ出すことはいくらでも可能だ。僕は拘束されているわけではないのだから。

でもそれは理性が働けばの話であって、こんなにも性器と性器を触れ合っている状態では。セックスをしたいという欲望に勝てない。

僕だって期待しているんだ。

大好きな女の子と生でセックスをしたい。できるのなら孕ませたい。

そして僕は夫婦なんだから、安心してそれができる。

「あ、ああ……っ！ 朝陽のおちんちん、入ってくるう……っ♡」

淫唇の粘膜がぬるりと亀頭を包み込んだ。それだけで僕はもう射精してしまいそうになるくらいに頭が熱くなった。

でもすぐに肉の膜のひっかかりがペニスの侵入をはばんだ。

どうしてかと僕が考えるその前に。

「んんんううう……っ！ あ、ああ……っ」

苦しさに耐えるような声を上げながら、琴葉が一気に腰を下ろした。ずぶ、ずぶぶ、とあつという間にペニスは膣孔へと呑み込まれる。

口腔の粘膜にも似た、やわらかな肉がペニスを絞め上げた。

強い快楽に僕は思わず腰を震わせてしまうけれど。

「はあ、はあ……」

目の前で荒い呼吸を繰り返す琴葉を見て、快楽に耽っている場合ではないと判断した。消えかけていたはずの理性が戻ってくる。

「大丈夫、琴葉？ やっぱり、初めてだから痛かったんじゃない」

フェラチオの気持ちよさのせいで忘れかけていたけれど、琴葉だって初めてなんだ。「平気……。痛かった、けど、思ってたほどじゃなかったから」

琴葉は深呼吸を何度か繰り返して息を整えた。

その言葉が本当かどうかはわからないけれど、ペニスを絞める力は少し緩んだような気がする。

「あ……。ここに朝陽のおちんちんが入ってるのね……。♡」

自分の下腹部を撫でながら、琴葉はうれしそうにつぶやいた。

僕も改めて琴葉とつながっていることを意識してしまう。

「玩具で処女膜破らなくてよかった……。♡ やっぱり初めての痛みは朝陽のおちんちんで感じたかった」

琴葉の海底のように深い愛情を感じて、僕は浅ましくもうれしさを感じた。

「僕にできることはある？」

「じゃあ、手をつないで」

まだ少しだけつらそうな笑みを浮かべながら琴葉は右手を伸ばした。僕も相對するために左手を伸ばす。

指と指を絡め、手のひらを重ね。いわゆる恋人つなぎというものになる。

「それじゃ、動くわね……」

琴葉の腰が揺れるように前後に動いた。

「あ、ああ……っ！ おちんちん、中で動いてるのわかるの……♡ あ、あ、あ、んう……っ！」

まだ琴葉の動きは小さい。でもペニスが膣粘膜に包まれているだけでも、十分に気持ちいい。口腔と似ているようで、より性行為に適したかたち。

「あ、あ、んんっ、あ、あ、あ……！ 動くたびに、びり、びり、ってするの……♡ き、気持ちいい……っ、やつ、ああつ、あんっ」

最初は小さかった琴葉の動きが少しずつ大きなものになる。

「こ、琴葉、初めてなんだから無理しないで」

「無理なんか、してないわ……♡ 痛いのもうほとんど感じないから……、あつ、やあつ、あんっ、ああつ、あんっ、あ、あ、あ……！ やあああ……っ♡」

処女膜を傷つけたばかりだというのに、琴葉はぐりぐりと膣粘膜をペニスにこすり

つける。膣ひだが陰茎を直に摩擦して、肉棒が熱を持った。

これがセックス。恋人や夫婦が愛を確かめるための行為。

自分の手でしごくよりずっと気持ちいい。

「あつ、あぁっ♡ んっ、あ、あ、あぁ、やぁぁっ♡ 朝陽のおちんちん、すごい……♡ おつきくて、硬くて、動き、止まんないっ」

最初は前後に揺らめくだけだった琴葉は、腰を上下に跳ねさせる激しい動きになっていた。

琴葉が動くたびに、ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐち、ぐち、と淫らで粘着質な水音が沸き立つ。それだけ琴葉の淫唇から愛液があふれているのだろう。

甘酸っぱい、メスの香りがする。

琴葉は僕のペニスの匂いを自分のものと少し似ていると言ったけれど、たしかに独特の生臭さは僕のものと同じ似ていた。

「あんっ♡ あ、あ、あぁっ、あはぁ……っ♡ おなかの、奥、ずんってすると、あぁんっ♡ すごい、すごいのよ……っ♡ ずん、ずん、気持ちいい♡ あつ、あぁっ♡ ふぁっ、あぁんっ♡」

琴葉は自ら動いて、膣孔の最奥を亀頭で押し叩いた。そのたびに快楽に震える肉孔

がペニスをきゅうつと絞めつける。

「だ、ダメだよ、琴葉……！　少し、落ち着いて……！」

僕が何をしなくてもペニスは勝手に強い快楽を与えられた。

初めてのセックスは想像以上に気持ちよかった。琴葉の淫唇は愛情いっぱい僕自身を包み込み、絶頂へと誘う。

それに僕の大好きな琴葉が目の前で快楽に溺れている。

ふたつの豊かな乳房をぶるんぶるんと弾ませ、目をとろんと潤ませて。寝室の薄明かりでも琴葉の白い肌が朱を帯びていることはわかった。

そんな光景は見ているだけでも僕を興奮させた。

「ごめんなさい、朝陽……♡　あっ、ああ……♡　本当は、いろいろ考えてたの……でも、おちんちんの気持ちよさを知っちゃったらあ……♡　あん♡　あん♡

あん♡　こんなの、止めるの、無理い……♡」

琴葉は濡れた唇を半開きにして、吐息と嬌声をこぼした。

このままでは琴葉に主導権を奪われたままになってしまう。

僕も負けたくない、琴葉を気持ちよくしたい。

「ううっ……！」

琴葉の動きに合わせて腰を突き上げた。

「ひああああんっ♡　ぐりっ、きたあ……っ♡　あつ、やああああっ♡」

突き上げられた琴葉の身体が弓なりになって震える。

「すごいっ、これすごいのっ♡　もつと、もつとちようだい♡　ぐりぐりちようだい♡　もつとお♡　あんっ♡　あんっ♡　あんっ♡　やあんっ♡」

琴葉が僕の動きに翻弄されたのは一瞬で、すぐに食欲に次の快楽を求めてお尻を弾ませた。ぎゅう、ぎゅう、と淫唇がペニスを絞め上げ、僕のほうこそ腰を震わせてしまった。

「ああ、琴葉……っ」

僕がか細く名前を呼ぶと、琴葉は薄く笑みを浮かべた。

「朝陽、かわいい……♡」

彼女は上半身を傾けて、僕の鼻へとキスをした。それだけじゃなく、頬や額にも。恥ずかしい。同時に気持ちいい。

琴葉に主導権を奪われているけれど、愛している彼女だからこそ満ちる心がある。

「ああ、朝陽、好きよ。大好き……♡　私、この瞬間をずっと覚えていくんだから……♡」

心の底から幸せそうに笑いながら、琴葉は僕の左手をぎゅっと握った。

想像していた初体験とは違っていたけれど、僕だって今日のことを忘れたりしない。

「琴葉、琴葉っ」

彼女に主導権を奪われることになっても僕も必死に腰を突き上げた。

「あっあっあっあっ、やっあああああ……♡ 気持ちいいっ、とっても気持ちいいのっ♡」

僕の動きに合わせて琴葉も動いてくれる。

初めてのセックスだけど、どうすればお互いにいちばん気持ちよくなれるのか、すでにわかっていた。

「ああ……っ♡ 朝陽のおちんちん、びくびくしてる……♡ もうすぐ出ちゃうのね、私の中に精液出しちゃうのね……っ♡ 来て、早く来てっ♡ あっ、ああっ♡ あんっ、やあんっ♡ ふあうんっ♡」

限界まで昂ったペニスを深く呑み込み、琴葉は腰を跳ねさせた。精液を誘うために作られたメスの性器が、オスの性器をぬるぬるとしごく。

「うう……っ！」

本当に出しちゃってもいいのか。

もしかしたら琴葉を妊娠させるかもしれないのに。

わずかに残っている理性が反発するのに、僕はそれを興奮の材料にしてしまう。

大好きな女性を孕ませたい。

それが遺伝子に刻まれた本能だから。

「あっ、ああっ、やうううんっ♡ 私も、もうすぐイキそうなのっ♡ 朝陽っ、朝陽っ、朝陽っ♡ 好きっ♡ 好きっ♡ 大好きっ♡ やっあああああっ♡」

「僕もっ、琴葉が、大好きだ……！」

本能が最奥へとぶちまけることを望む。

びゅるるるっ！ びゅびゅびゅびゅびゅくっ！ びゅーっ、びゅーっ！

僕は抵抗することなく、中へと射精した。

「やっあああああ……っ♡ 熱いの、来たあ……♡ これイイのっ♡ 好きになっちゃう♡ あっ、あっ、あああああああっ♡♡♡」

僕の左手をぎゅうっと握りしめながら、琴葉の腰が弓なりに反る。膣ひだが射精したばかりのペニスに絡みつки、さらに多くの精液を搾り取るために蠢く。

「ああ、琴葉……っ」

不安や後悔を抱く必要はない。

僕は夫婦で、子作りをするのは当然。

だから安心して最後まで精液を注ぐことができる。

「ああ……っ♡ お腹の中、満たされていくの……♡ あ、ああ……っ♡」

いまだ快楽が身体を支配しているのか、琴葉は、びく、びく、と身体を震わせた。僕も胸の鼓動が落ち着くまでしばらく動けそうになかった。

「はあ、はあ、はあ、はあ……♡」

琴葉は荒い呼吸を繰り返した。

やがて落ち着くと、琴葉はゆっくりと腰を持ち上げた。

「……ん……♡」

ずる、と射精して萎えたペニスが淫唇から抜き出た。肉の割れ目からは愛液と精液の混ざったものがどろりと垂れ落ち。

「んへへ……♡」

琴葉はだらしない笑みを浮かべて僕の隣へところんと転がった。

「中出し、しちゃったわね……♡」

「もし子供ができたら、琴葉のぶんまで働くよ」

夫婦として当然のことを僕は約束した。

「うん、ありがとう……♡」

「でも！ まだ子供ができたって確定したわけじゃないから！ これからはちゃんと避妊しよう」

琴葉の作戦のせいで中出しをしてしまったけれども、子供を作るのはまだ先にしたい。もちろんこのセックスで妊娠が確定したら責任もって育てる。

「大丈夫、私もそのつもりだから。これからは避妊のためのピルを飲むわ。でも……」  
琴葉はにんまりと笑う。

「ピルが効くまでは時間がかかるの。もしかしたら効くまでに妊娠しちゃうかもね……♡」

僕は心の中で誓う。

結婚したんだから琴葉を不幸にはしない。

だからそのためにはピルが効くまでにセックスを我慢しよう。

でもそんな強がり、初めて与えられた快楽の前では無意味だった……。

続きは本編で！